[illegible]氣文　全

911.3
ホ

雑談文

蓮二序

正徳未のとし三月十二日湖南の木曽寺にして
て先師の廟にまうで名残をおしミ奉るさるに
今年より俳諧の口を閉て静に念仏門に入つき
とや我師が門て先師の門に入るよりも東華
西華の名にまぎれて蔦の松原に入学の門を
ひらき語に論ずる姿情の奥義とさまざま金
をのへれ俳雑をひらいて作法をひろむる人と云
命し延よりは西湖南の交をむすび入にわか宗

の信をうけて双林寺に碑をたてゝ名をとゞめし也
芳野山の吟に一生の口を閉てその秋八月十二日
に往生の素懐ハとげられしやさるを先師
の正灯を伝ふる俳諧ハその離ニさしてとゝ
みゑハその宗を六部ニ何を人ひとしふるに
あちら此躰をとゆるにあしさまをとおもはれ
行師ハ先翁の光にあそひ我ハ我師の詠を
ねふ人ある一しかなし俳諧ハ八十ひとの変化
ありて冬此日其の日此二集に正風の心をわか
尾張のあさ吟に風情をとゝしの猿蓑集に

なりて実くさ実をそふ花を俳諧の花と集
をいふ一世をいには集に眼をさらして其比
あはれふるす年ひとしその比武城に炭俵を
千集をえらミて人のふれしも実をやふるにそこ
御の方筆記に御化の執心をもつりおるとく
けしきて俳諧のあるとよこり月も此務そゝと
あひはくるやとて猿蓑を遷化の秋
まとかれて此集の屋室一合とあるし
なかつてなふさて実なし実あんや先翁ハ
まつてみちひの変化とみて實にけ俳諧の

元祖さへあらくつきぬ也されは東西諸派の二葉
の中よりわけて緑に新古諸のむやうある所に
あるへは天下これをみてその業とりてあそふさは
人情の実に局して其のむにうかれくる俳
先へしそのてらかへはれ金銀に貝陀羅尼をえ
むすれは俳諧はもとしよの法をとりふへるして言語
の様躰るは口てるよりこしとあるも本に又を依
語によちらく風情をはたられは俳諧のたかいのあし
それそのうたに一線路を通しされとも是まてに
不さてまたの情に越して是とそふんとなる人

は世に徐也実に就師は俳諧の時をとするとして
芭蕉翁の一言によそれ口とおもふ家に之俳文は
古今の変化をとへは万物は始中終の之をとて
その姿をあらしてその情をとらる千変万化
も皆之の力をとはわさる也しかるに此俳諧は文字内
に修るも段々始終をつひてその中に伸まる
実と風情とによる是まても貞徳自宗むより
雅俗の雅あるも皆之をとはまうしろみ宗因しく
それ古池の蛙に至るの言れ終を守てその中に
まひしき情をつひ和してはかるまい始終の二

に遠きをもてかざれば古今に風雅の余情を
あらてはしらて詩歌連俳といふ四門の額を
かけぬべし されば今此世の俳諧のもはらなるや
古今に俳諧の元祖なりんもむべ也 山崎宗鑑
もその変をおもへは言に世始有徳の達人なりし
やと濃山の風雅をかしくして阿誰(タツノ)話此一集
まさの熟との中に行わざの人は我に説破せし
れて古今さまにせうしきありとおもはれし世の人
はかりてせ集あるをすとも考へてきまさへたる人
あるまじ 眼下にみえるらして一葉歳の外に有る如聲

如唖のごとく文あるし 蓮二言に曰のてしかあやまりを
さへ一生の有得は世ぬふるとまさるにしたかは
天あり地ある時は物に始終の二ありて其の中に
人間の境ありとさくれば詩人は風月にあそびもの人
はむさまにあそびに遊ぶて終りあんともな世性
分分のかへちかして俳老の宗此西同坊の手
合しいうや我心の細解にさへられてしかあや
まり此言にいひて志れるやはらく 蓮二か
一生を悔せし我言し 五十一年にしてはじめて四十九年
の非をしれるすは曾子の是非まくおくるるやしらさ

昨日も非なりて今日も非なりとおもはんまはいつれ
さりや儒釈老の三教よ道と法との二あるとて
道ハその人とゆりし法ハその道とてさて人乃
賢愚よりへくしてその所よりちらんやその道
あるハその法あるへしとハ称むらし入学のはしめ
よすて道ハそのかよそくねさて法ハをのれか
おもさらふそふするとおもふさるしおもふハ蓮二か
あやまれる不世妨有孩の意ハ一时の戯論
よして法をおもふさるハ一生の一大事なるとや
是よし法の一字をおもへるより挑治の意ならとの把

よあさいさるをおもへるも支道ハ人よありて人よ
をしへ支法ハ我よありて我をとてもをはれさよ君よ
ハ独をたくおもむとのそれハ法ハ慎の一字なりして
我をおりて人よおもとらし人へとてもしてをのれよ
失さる时ハ法をそて法くおもむとふ二字ある信一
おもも此二字ハ三種よ従ひらして誠ハ道の字
をおもへ法ん誠か法の字をおもへさらん也らしは
人よ少なき人よをしへ今ハ我ハて我おもへるより
今けるさ先賢の言語をおもさひて寛よ五十年
の非を悔るねなるへし・我ハなまのま境の田家

にはなれて貴高のつに膝をかゝめ富饒の人のま
とゝまりて人にうれへ諂ふにちかく人とうまれ
貴なるは卿大夫にまさる人しれずも相国の位を
ねかひて人の上に居て下にくたる事をおそれ
ますやとするも官禄をよろこふなるあるて
そのなかのそれその位をひろむるも人をうらひ
まして自在なる故也我は善悪し芭蕉翁は
入て俳諧の一脉を興せしより天下をして我か
狂論におされて眼ふにみをあさむく人も
ふみれんとのつる人の上によるらひありて四方

の刑者をも越度にせさりし一流の達人と云かれ
にしてまさるも終に一寸此片居を動して天下
の人の香氣を嗅取そしてふへしたりる人その名は
将もたまへるその位はりおに油注せさぬすりて
先師の餘光をきて是かなにかへきをたくしね
庵し併におそるへく併にもむへく是をも
はしあしきるんや是をも信しきるんや是よ
発句の事をきなれんやも我師やさしてに此年此
勝をくらさきて俳諧ふん三十余箇此撰むを作く
作れくの讃ふん十五おの後者をとりし其言れ

本曽なるよハ十百韻の手向七ぬし後の双林なるん
七〻子の碑の供養をとげぐるにせの人ハその功を
かぞへとして彼れは利名をむさぼりて只その党を
かぞふる人なりとおとしめり我ハましてその公よ
その車をおして師法ハ世をふ滅せるといへく
其よ此車の人のかへりさるすとあらんや是を悔て
て是をはくまむとつゝむされし此法を伝して
我世のはしらがあんまで我ハねの世れ報せとりかへり
へきま二師の恩をあふさてその法を伝ハむして厚も
師恩をむくひさらんハ未来れ報せもはるかに

あやまれる故なからん況や此時にいたりて世の俳諧
見るに日々におもむきて新奇をとりもつて古今の
通情をうしなひてたゝしきにちかふ俳諧いよいよ奇言
妙語ならんて風雅の連情ハ此句よ法をうしなへし
なれハ芭蕉翁の法ハ此世よ乾き法をまたく蕉子
一滴を残せる人あらんハその罪ハ蓮二が肌骨
にせ申りて向梓の責ハ我にせめあるへし海道一
此ものに此序をまつりて此記文をなせる事
ハ世にもの俳の人をとふらうしてその人をもちめに
我ならんやと一万一をねがふ世の懺悔ならんと此一言偈

の画情をさしけて風雅の名をとをれしこなる
謎にそちては俳諧の家ともへく謎にたとめ
ては念佛の門に入へきそや

南無佛
南無法
南無僧

序前
蓮二房

桜咲ちる／＼弥陀の彼岸は
霧の中にふみ見る鏡
湖のよ勝く時めりて
刀さしても売て居るも
有されのもぬ借屋は楼やら
気の時なさ隅あれな

此本意ハ専れハ鎗(ヤリヤス)あまつくて
祖父と祖母との中にまれく
餅の音も此子の家にゆかしよ
白壁やてハあちこち一郎
兵衛の子孫ね澤三郎ハ本より
騎馬とつれハ天和之年
様の家ふよる為と成へる小荷を
玉江の内此ならへ作

此比ハ亀のことひしてさ川
浩訳ありまる揃洞
服法めとてくれハ嫁の記して
務あまりて親よ初年
ふさく時柄へあけたる亜史雄
味をとらけハみそれも度氣さ
すし空のあるに庸義子作文法也
紀かうらかくる々段なのさし聞

次頭の膳に醉のくれ行かず
杜律の耳へきこゆる三味線
二上り糸のつれかなしく
色香妹をはらきておきの元禄
唐桃のあかぬやまをおしまして
食地のむそるかえてんさる
名月に念の入る心の草
くぶしぬ音と膳しゃれん

ウ
ハギ
極楽ぬるてれれるさ酒くに
弁天王のちようてかぶりぬ
此界にあんな宝花もなし
銚子はるえて吸物の辞票
むにあ低定はの移る其の花
風雅の内はきて梅に寄る

名利解　　渡部狂

むかし芭蕉つゝむ世をすてられあり
名利のちまたをのがれてはなるゝ人
あれど世をしる人もあるべし　それは見しる
人は俳諧をわすれて天下にあまねく俳諧
もあまさに一派の利用をおもくなして
隠者をたちて俳諧をしつひをおぼゆる

人は只よきとおもひてよきまて寿絶の子なく
下つけれは東坊か情なくあくるを
こゝろみ人は芭蕉比つ人として俳諧にまし
正風と唱へ世をたもちし血脈と称する
者も先哲の滅ねて何の報恩をなして
か翁は芭蕉の一弟子也行ひ良かれとも
其さわれは芳義のあはれを考
誹諧の道ひを称へられしは予人をさゝぬ

知もかてつらしさふある一しれともやめてと
其きわれは人のみくまん利をもとめ
は人まきにれてふるまひ猪梅よりつめを
ねんきれともなしおれんも従ふ人のよ
ありてけるかを考ばれん考ゆてをし
らるし人は栄しらるしてよ此入用あると
おのとし欲きて業なかしおく勝
の道者を速は様子よろしくの外金銀の用も

あしく俳諧は業とのし人にかゝり面かくれて
目をかさく時に一字の功もみつさて大極の
頂抜に見先せさる事をしまはゝそれ
名をうに書て侍らんそれをも大尊大以の
好名をかしかましくいふは似てかと覚て
諸よつる輩のまねよりていよいよ世相
の俳諧なし一世ゝ東西坂と
いふ者に先師の之年まで古翁の辞寄と

ゆするしより十年まで俳席の本實ちに
千句の難をかけて東西七ヶ国の人と
信し十之年まで洛の双林寺に一万句礼
法養をとする又我を遊行上人の寺を
かりて凡国中国より諸歩の集く
北く一然し翅侍の浦くを廻て東武
の京に人は歳作のなくしとはそれぞれ多く
よき日ごろの作品とのする又淡路の

字近き詩の字をよみわけて其時の作者
を讃し末世の法孫と称されて十七年
に假名の石碑を造立して其故か
に一首の作譜をひらく誦経は二十
余僧を供養し説法は五十余嘗を
郷応して而して石碑に假名の縁起
まつは是を読むものよむへしといへり
されはこれそその追善にそれの妙用と

かゝれは今も其むかしを偲ふ所なるへし
あつしこころの御恩にむくひては
大功をつくしむへくは何ゝそ名をたゝへ
はらん何ゝそ利をもとむへきはらん
名利の入目に躍ることろの所撰なれは
まつは酒色の徒とせよ衣服のかさり
をも好ましきをもとめす卿は釈迦
の一喜より一代説経は阿難によりて存る

とその阿難といふ女犯放逸のことなるあるは
むかへて修行をひろむるうちにその身を
名利のためにするなも我おもふそのます
と修へては蓮の宗なれは頭にたてるを
親鸞よりあるいは蓮如にひろまる近くは
隠元の法と修へて黄檗の大功は木庵
の方丈にてとまるその和尚にも猶は
所業の名とせうしは名利のうちに交

と求て王侯貴人に對するかなもあきて
その修は名の為に信をおもうして名利を
求それ富貴を得まて永くこれ任を深
その弟子はその為に功を立て名利はあるひ
富貴にましりて俗にこれ任をひろめ
させてまうは人のその弟子をおしつきて
その修に及ばさるといふは古きて此通情也
親鸞は其上歌の大悪人として

第一の仰ハ迦葉にゆつる第二ハ国王
大臣より有力の檀那に附属すといへり
阿難の子孫にまもりて一宗建立の利
用にあつからんや大臣ハさらなり利より
おこれるを秘していはさるハ儒仏の一致
也されハ阿難なる者の放逸をもゆるし
本庵和尚の伊達をも人のしてあらん
有力の檀那ハ二拝す孫の志をはらひて

ある寿持なる弟子やとゝむへしまうし
なめたしる人ハ二孫の後まても又あれ賀
くて気ひかひかなハされハ人の實語に易
をかまりて貴妙公子に云ることんて我
ハ風雅の隠者なり彼ハ放逸の游人也
とおれを示しれるまゝ仏もなき足を
抜らぬまゝにある一しかの東坡ハ天下
に深信して凱定をとまのひ来て罪者に

くらしえ面ハうしぬ人に對してりこの
俳諧をさしてむるすみのや何のさとある
ぬしく俳諧より先に汁用とエまさへし
さるハ我俳諧を人にあすらぬんぞうれしおそ
人の俳諧をすて遊にんぞうれしあつきを詫合の
学殺にあいろんぞうれしあつきを今日れ名常
をはなれんぞうり才一ずいも先君の越ことを
はらく才二ずいと才子の大功をさとしんにさを

あしハ名利の二をはなれて金銀のちうハに
よらんハいうてうえをひの大功をとつて世
へきや利ハ世みして名ハねあるつをを
あるへし言に大よまのけ世にみられて孫に
同をの褒貶をいよひて千歳のね乃
功名を失んや利ハよしなよそうハ
小数みして人ハそてを死ねの名をおそる
金ぶりすや

し

附録

きと山の月に一峯かゝる紫かう　二竹

風やあるおひそうに雲のむ　兼伍

冠里公ゟ
めされて

ゆんとする梅のつちひや清川
まんて　木因

曉のきち清や敷居に窓の月　盛重

梅さくや豆藤の影より雪照　壺平

穢し此尻もむさ苦し粽哉　角呂

引来や八百次郎か供まて　太紀

雪は瑠璃の壺より初音哉　尾張 雪川

名守を襟に附して孫子哉　丘

臘八やはされは婆は此菜暮時　手曲

むらかりは炊さまよ飯の煙かな　十竹

ねふ昧暁の花や綻て窓の梅　湖彦

雪よれ北かくや巻て粽かな　廻静

一念の飯に霧こしやえ千羽　丹丟

鰯やくまほひもそし枇杷の花　徳和 蘭之

麦飯とおもし時節を郭公　米岩

数珠を入れて水晶はける柳かな　湖南 秋笑

横雲とあやめのきれや流和　千那

名月や秋すすへ丁ねの月　虹は 過角

雪よりも柳まろし名の月　九朗

きぬや猶暗かりさる比猶より　坡竹

打よせて月の捧の花ちらすまじ　松中　柳化
精進のれも篝かゝる柳かな　巴笥
畑打を男にまかす雲雀かな　吾秋
夕顔の咲かぬ行ありなしの月　信房
題忽にあはれや秋の咲荷足　松谷　伯先
露百はまして風ほの花ひかんな　東想
西吹て風の吹きやまし一葉　小松　亭中
蛙とちるさて十九土用や一葛籠　伊セ　曽北

松茸に用意にあつかる豆腐哉　乙由
一葉はや秋にはの花く山路かな　兎史
文通
きと山やさんなはいりはいかゝる　耕坊
陽子かりまてつりちきりはらの月　小枝
大風はに杉のなしきまる扇かな　従吾
天井をはらふしと十ね汁　江戸
又　これらの不易流りも今は世上に
ひろまりひろまるや天下の俳諧の

なまへとあふら陀羅尼のね
のりものあんか
雲のは今はそ白地形　一万子
作者の簡もきこえしける　白花
拙いゑは純子の花子をとるると人て　吾仲

第6396號 36. 3. 14 受入

京寺町押小路下ル丁
たち花屋治兵衛板